

せんせいのつくりかた～教職大学院のこれまで、これから～

立命館大学教職研究科 後藤 文男

立命館大学教職研究科 小松 茂

井上雅彦教授 ただ今より、後藤文男先生と、小松茂先生の退職記念シンポジウムを開催いたします。私は本日、司会を務めさせていただきます教職研究科の井上です。どうぞ、よろしくお願いいたします。オンラインを含めて、100 名近くの方に参加いただいております。どうも、ありがとうございます。それでは、まず初めに、ご退職されるお二人の経歴等について紹介させていただきます。最初に、田中博先生から後藤先生の経歴をご紹介します。田中先生、よろしくお願いいたします。

田中博教授 失礼いたします。後藤先生のご紹介をさせていただきます。後藤先生はご存じのように 45 年の長きにわたって立命館の教育に深く関わってこられました。小学校の校長、中高の校長、大学の准教授、そして附属校の教員の研修をつかさどる教育研究・研修センターの初代のセンター長もされました。様々な分野で、リーダーとして立命館の教育を引っ張って来られたと言ってもいいかと思います。

私自身、立命館に勤めて 39 年間経つのですが、文字通り 39 年間ずっと先生と一緒にやってきました。同じ学年、同じ分掌で仕事をし、先生が副校長の時に私が教務部長をさせてもらい、先生が校長の時には教頭をさせてもらうなど絶えず、直属の上司として一緒にやらせてもらいました。私が近年、力を注いでいますスーパーサイエンスハイスクールも先生が校長の時に構想して来られたもので、科学教育の国際化というのも、生徒たちを連れて出掛けたオーストラリア、アデレードでの国際大会が最初でした。

そんな形で本当に長きにわたって、私を導いていただくとともに、様々なお世話をいただきました。逆に私がお世話することも多々ございま

したが、そんななかかわりの中での、後藤先生への私なりの印象は、リーダーとしての判断に一度も間違われたことがなかったということです。中高時代の校長の時、執行部会などで先生が強引に決定される場面がいろいろありました。終わってから、他のメンバーたちと「あれは間違っているな。後藤先生も、ああいうところは意地にならばるところがあるからな」と言ったりしましたが、4・5 年し、振り返ってみると、あの時の一歩が大きかったなと思うことが何度もありました。先生の決断は間違っていなかったなという経験を何度もしましたことで、多くを学んだように思います。

近年は、白川漢字教育に情熱を注がれておられますが、小学校の児童から中高の生徒、大学、大学院の学生、院生にわたるまで、本当に情熱深く、愛情をもって接して来られました。おそらく、院生の皆さんも、先生から多くのことを学ばれたのではないかと確信しております。先生が退職されるということで、大変寂しい思いではありますが、まだまだお元気ですので、これからも一緒に仕事をすることはあると思っています。ですから、今日は、取りあえず「退職おめでとうございます」と申し上げておきます。

井上 田中先生、ありがとうございました。次に、伊藤陽一先生より、小松先生の経歴をご紹介します。伊藤先生、よろしくお願いいたします。

伊藤陽一准教授 それでは小松先生の、ご紹介をさせていただきます。小松先生は立命館大学法学部、同志社大学大学院法学研究科を修了されまして、京都府宇治市にある中学校、社会科教師として教員生活をスタートされました。その後、総合

教育センターの主任研究主事兼指導主事を経て、宇治市立中学校長、クアラルンプール日本人学校長、を歴任され、退職後は京都教育大学大学院連合教職実践研究科にご勤務されました。そして、本研究科開設時の2017年4月より実務家教員として、ご活躍され、今日に至っております。

小松先生は皆さんも、ご存じのとおり本大学院教職研究科の顔であります。大黒柱でもあります。そして、われわれ実務家教員の精神的支柱でもあります。われわれ実務家教員は、小松先生から教職大学院とは何か。実務家教員の役割と存在理由とは何か。研究者教育と、実務家教員がコラボするには、どうすればよいか。ゼミの運営の仕方はどうすればよいかという、極めて実践的な内容から、教師とは何か。授業とは何か。研究とは何か。児童生徒の理解とは何かといった、教育の本質に迫る内容についても、私はたくさん教えていただきました。特に私は、ここへ来た1、2年、小松先生と1年間、同室でした。私は大変ありがたかったですけど、小松先生は苦しかったのではないかなというふうに思っています。

あと小松先生で特筆すべきことは、2020年から始まりました教職員支援機構、立命館大学セミナー開設、その企画、運営において副センター長として、実務の中心的な役割を果たされたことです。コロナ禍という大変、厳しい状況の中、五つの教育委員会と本大学とを結び、現場のニーズに合った教職員研修システムの基礎をつくられました。これは、小松先生にしかできなかった、大変画期的な出来事であり、大変なご功績であり、われわれ立命館に勤める者にとっては大変な誇りであります。

最後になりますけれども、小松先生を語る上で一番の特徴は、スピードであります。とにかく歩くスピードが速いです。そして、思考、判断、決断、実践はマッハのスピードであります。もちろん、ただ速いだけではなく、その発想と決断は、的確で創意に満ちています。

そしてさらに、小松先生の素晴らしいところは、卓越した聞く力、話す力、読む力、書く力にあります。そうした伝え合う力を、余すところなく全力で発揮されていることにあります。

常々、小松先生の口癖は「院生の血を入れ替える」。院生と関わると、いつも、へとへとになるんだよと、笑顔で話されています。私たちは、その小松先生の全力姿勢を身近で拝見するたびに、もっと頑張らないといけないなど刺激を受ける一方、小松生に対して尊敬と感謝の気持ちを新たに毎日、勤務している次第です。

小松先生とお別れするのが本当に大変つらく寂しい思いがありますけれど、これから私たちが小松先生の遺志を継いで、みんなで協力して頑張っていきたいなというふうに思っています。きっと、こんなときは小松先生やったら、どんなふうに考えはるやろと、どんなふうに決断されるだろうということを考えながら、仕事していく毎日ではないかなと思っています。小松先生どうも、ありがとうございました。

井上　それでは、これより退職記念シンポジウムに移りたいと思います。シンポジウムの進行は研究科長の森田先生と、副研究科長の私のほうで進めさせていただきます。よろしくお願いします。

森田真樹教授　それでは、よろしく願いいたします。研究科長の森田でございます。今回は、このような形の退職記念シンポジウムにさせていただきました。こういう形になったのも、実はお二人の先生がたから、最後にすごく堅い雰囲気講演会みたいなことを行うよりも、いろいろなことを語り合うような形のシンポジウムのほうがいいという、ご要望がございましたので、このような形で進めさせていただいております。

私と井上先生のほうから、いろんな質問を投げ掛けながら、お二人の先生がたに、それぞれ、お話しいただく形で進めさせていただきたいと思っておりますので、短い時間ではありますが、どうぞよろしく願いいたします。

では、早速でございますが、先生がた、まず先ほど、ご紹介ありましたような、それぞれ本当に長い教職経験をお持ちですので、これまでの教職経験を振り返っていただいて、長い経験の中で、先生がたが印象に残っているということをお話しいただければと思います。では、順番に、まず

後藤先生のほうから少しお話いただけますでしょうか。お願いいたします。

後藤文男准教授 私は1978年に立命館高校で職につきました。それから、今年で45年目となります。数字だけ見ると一つの学園に半世紀近くいたこととなりますが、振り返ると何事をしたのかと思うほどあっという間だった気がします。

ただ、たまたま入った立命館が総合学園として様々な学園改革を推し進める勢いのある時代と重なったので、一生同じ職場で過ごすはずだった人生が思わぬ展開をして今日に至りました。気が付けば、小学校から中学、高校、大学、大学院までの教員として教壇に立っていました。一人の教員としては、なかなか経験ができない教師生活をさせてもらうことになりました。ただ、後半は管理職として学校運営に関わり、新しい学校を作る仕事にも参画することとなり、最前線の現場から離れましたが、それでも、夢にも思わぬ44年の教員生活でした。

そんな教員生活の中で、印象に残っていることはと聞かれ、最初に浮かんだのは若い教師時代の出来事です。

教員2年目で高校2年生の担任をした時です。秋の文化祭の演劇中に、舞台上で本物の酒を回し飲みするという前代未聞のできごとを生徒たちが起こしました。それで、当時の校長から大目玉を食らったということがありました。劇の出番が終わった後、先生のクラスの子たちの顔が赤くないですかという他の先生の通報で発覚しました。もう、40年も前のことですが、忘れられない出来事です。いい劇に仕上げたいと生徒たちも気合が入っていました。実際にいい劇に仕上げたと私も思っていました。ただ、劇に入り過ぎて村人たちの酒盛りのシーンで本物のように見せたくて本物を使ってしまったというとんでもない失敗を起こしてしまいました。とにかく後先を考えぬエネルギーを持った生徒たちでした。ベクトルの方向さえ間違えなければ、社会に出て大きな力を発揮する、そんな資質を持った生徒たちとの最初の強烈な出会いで、今も心に残っています。

私学総合学園のいいところかもしれませんが、

出会いの刹那だけでなく、一人の生徒がその後大学、社会人とどんな歩み方をするのか、追っかけていくことができる関係性を作れるところが面白いです。件の事件を起こしたクラスの生徒たちは多種多様なところで活躍していますが、中の一人は、現在大学の副学長をしております。エネルギーの出所さえ間違えなければ大きな仕事をするパワーをもっていることを証明してくれた一人です。

ですから、小学校から高校までの12年間。長いスパンで生徒たちの成長を見る眼を養わせてもらえたことも大切な一つになりました。中等教育の普通の学校の先生なら、3年区切りのスパンでしか、生徒の成長を見ることはできませんが、12年間という長い時間、子どもたちの後姿を見ることができたおかげで、いろいろ気づくことができました。子どもはどんなに停滞しているように見えても、必ずどこかで目覚める時期が来るということです。そういう時期が来るまで、粘り強く待つてあげることがとても大事だということです。近視眼的に子どもを見て速断してはいけないということ学びました。

そんなふう子どもたちを見ていると、どんな子が伸びる子なのか見えてきたことがありました。伸びていく子が持っている資質は3つ。一つは、「素直さ」です。二つ目は「丁寧さ」、三つめは「粘り強さ」です。「素直さ」というのは、言われたことをちゃんと聞くという素直さではありません。もう少し、「好奇心」的なもの、学ぶことへの新鮮さを失わない態度なんです。選り好みせず、どんなことでも吸収しようとする態度と言ってもいいかもしれません。丁寧にやる子は、ものすごく時間がかかっても、最後までやり切ろうとする子です。そういう子は、生きづらいです。早くこなすことが「よい」と言われる中では、時間がかかりすぎる子は、置いていかれます。でも、それでも物事を丁寧にやらないと気が済まないという資質は、必ずどこかで芽吹くんですね。そして、最後の「粘り強さ」。勉強というものは勉強しただけ、正比例的に結果が出ないものです。やってもやっても、なかなか結果が出てこない、それでもやり続けているとある時「わかった」ってなるんですね。そこまで「粘る強さ」が必要なんです。それ

はおおよそ、3か月です。3か月学び続ける粘り強さを育てたいです。「素直」で「丁寧」で「粘り強さ」があれば、今結果が出てなくても、必ず子どもは伸びる、子どもたちの後姿から学んだことです。少し、話が長くなりましたが、一端終わります。

井上 ありがとうございます。それでは引き続き、小松先生、お願いいたします。

小松茂准教授 まず、話しを始める前に、お集まりの先生がた、それから事務職の皆さん、僕が何とか今ここに立ってられるのは、本当に皆様に支えていただき、自由に伸び伸びと仕事をさせていただいた賜物だと思っています。最初に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

それから修了生、ならびに在籍してる院生の皆さん、かなりわがままな教師です、僕は。色々な場面で様々な「ちょっかい」をかけながら、みんなの頭の中を、ちくちくと刺しながら、容易に結論が出ないようなことについて、辛抱強く一緒に勉強していただいて、本当にありがたいと感じています。皆さんの存在がなければ、私はもっと早く老化して、腰が曲がって頭がぼけて、その辺を徘徊していたかもしれません。皆さんと一緒に学びを進めてきたおかげで、何とか、この5年を無事勤め上げることができました。まずは、感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

実は、そんなに話すこと、たくさんはないんです。話すことは、授業の中とかゼミの中でほとんど話してしまってるので、今、座っているのは本当、出がらし状態の僕です。そもそも、教員人生で三回も退職するっていうのは、めったにないことです。公立中学校に勤めて、いったん退職し、これから余生をとった矢先に、偶然のお誘いで教育大学に勤めることになりました。その任期を終えて、ようやく自由気ままにしていたところに、春日井先生と森田先生から電話が入るといって、本当に不幸な（笑）人生を送ってきまして。開設から3年程度で一息つけたので、ここで辞められるかなと思っていました。そしたら結局、ずるずると5

年が経ち、ついに70歳になってしまいました。70歳といたら、ひと昔前ならお爺さん。

そんな歳まで勤めた自分を振り返ってみると、今の自分のベースになってるのはやはり若い頃経験かなと思います。私は、根っからの社会科教師です。興味・関心の所在とか、ものの調べ方とか、発想の仕方において今でも社会科教師のまんまなんです。それがベースになってるので、地層で言うところ4層構造になってるんですが、社会科教師としての自分がまずベースにあって、誰もやらないのでやるしかなかった管理職としての経験が18年間。その内、平の教員の時代が16年で、そのあと管理職が18年。教員の経歴として見ると、これはある意味「地獄」です、いま考えたらね。だから、その間に自分で目先を変えなきゃいけないって思うようになった。これが、後で振り返ると僕にとって本当に発想が変る転機だったのです。初めて自分の欲を出し、押し通しました。海外で勤めてみたいってことです。海外に出て、マレーシアの日本人学校で校長として3年間。これがなかったら多分、今の私はなかったといっています。だから、任期を終えて日本に帰ってきたときには、ほとんど精神的に出がらし状態。定年まであと3年あったんですけども、結局2年で、荒れていた学校もあらかた落ち着いたので、1年早く辞めさせていただきました。そこで、教員人生を終えるつもりだったんです。ところが先ほど言ったように、その後、教育大へ行き、さらに立命に来ることになって、只今こんな所に座ってることになってしまったわけです。端的に言うと、人間の一生なんてものは、設計どおりにはならないということです。

「人間万事塞翁が馬」という言葉ありますけれども、こういう場で話しをする方の多くは、僕はこういう信念を持って、その実現のためにいろいろやってきたって。どうも僕からすると、うそっぽいですね。人の遍歴というのは、ほとんど偶然の産物です。大体八割方は、周囲の変化に必死に適応しているうちに歳をとっていくという感じですね。ですから、何か信念を持って、教職大学院に就職し、教えていたかというところ、そうではないですね。仕事として、降りかかってきたものを

自分なりに考えながら何とかやってきて、今ここにたどり着いているというのが、今の僕の偽らざる心境です。

話が長くなりますので、また後で話そうと思っ
てますけども、僕の一番の転機は先ほども言った
ように、日本という国から一回外へ出てみた。こ
れ、本当に大きいです。頭で考えるだけではなく、
体や感性まで揺さぶられるような体験をたくさん
させてもらったという、これが、もう一回、その
後、生きてみようかという、自分の今につながっ
ているなというふうに感じています。

結局、「教師」と名のつく仕事に43年間。そろ
そろ本当に疲れてまいりました。70歳になりまし
たから、この後は、どこか皆さんの邪魔にならない
所で静かに暮らしてみたいというふうと考えて
おります。邪魔しないでくださいね。(笑) 以上で
す。

井上 どうも、ありがとうございます。教職
経験をたくさん積まれた先生方にお話をいただきま
したけれども、立命館大学の教職大学院での思い出
を話していただければと思います。よろしくお
願いいたします。

後藤 僕は5年間の中の3年間を立命館小学校
の学校長と兼務していたこともあり、ほとんど小
学校が中心になってしまいました。朱雀に来るのは
会議と授業だけというような生活でしたので、
教職研の仕事はほとんど他の先生方に任せてしま
いました。ですから、先生方に負担をかけたとい
う心苦しい気持ちの方が先に立ちます。3年で任
期を終えて帰ってきて、「さあ、これから取り戻さ
なければ」と思った矢先に、今度はコロナの感染
拡大が始まり、ただ、他の先生方の後ろをついて
歩いた2年間になってしまいました。

授業では、いろいろな先生と関わらせてもら
いました。神藤先生は「学習科学と教育方法」の授
業で一緒でした。神藤先生のまじめさとあのユー
モアとのギャップにいつも驚きました。春日井先
生、小松先生とは「現代の教師」の授業で一緒さ
せてもらいました。春日井先生には、柔らかい中
にもただならぬ芯の強さを感じていました。僕も

春日井先生も岐阜県出身ですが、春日井先生は東
濃出身ですから、名高い「恵那の教育」をまぎれ
もなく受け継いでいる先生だと実感しました。小
松先生は論理の人です。その論のすごさには舌を
巻くことができました。今もそうですが、なかなか
手ごわい先生です。先生を見ていると、僕は正
当なまじめな教員だと思わせられます。言い出す
ときりがありませんが、ご一緒させていただいた
先生方のそれぞれの個性に感心することが多かつ
たです。

ただ、授業としては、久保先生と始め、菱田先
生と受け継いだ「特色ある学校づくり」の授業が、
一番印象に残っています。現職の先生方を対象と
した講座でしたが、半期の間に先生方が成長され
ていく姿が垣間見えるんですね。教育現場から一
歩引いて、これまでとは違った目線で自分の学校
を見直し、教育について他の学校の姿を鏡にもう
一度捉え直しをする中で、次第に視野を広げてい
かれる、その姿が手に取るように見えてくるので、
とても楽しかったし、僕自身はその姿から学ばせ
てもらっていたように思いました。全体として教
職研に十分な貢献はできませんでしたが、思い出
としては、こんなところですよ。

井上 小松先生、いかがでしょうか。

小松 先ほど言いましたように、自分が志願して
教職大学院の世界に飛び込んだわけではないので
すが、私なりに、教育にはずっと携わっていた。
しかし経験だけでは如何ともしがたいわけで、教
職大学院での勉強っていうのは、どういうことを
するのがいいのかということについて一から考え
ねばならない羽目に陥りました。そこで、京都教
育大に赴任する前に、何か取りあえず、まとまっ
たものを読まなきゃならないものがいていたとき
に出会ったのが、コルトハーヘンの『実践と理論
の架橋』という本です。原書を横に置いて、翻訳
(邦題『教師教育学』)と対比しながら読んでいき
ました。その中で、「学ぶ」ということについての
認識が、本当に変わってきたんです。

講義でも言ってるんですけど、「学ぶ」というの
は、教師が教えて、生徒がその発言を受容すると

ということではない。お互いに、ああでもないこうでもないと言いながら考え深めていく、そのプロセスこそが学びなんだということ。そのためには、自分が実の所とところはものごとについてあまり分かっていないから、まだまだ調べなきゃいけないっていう、その「無知のリフレクション」なわけですね。この自覚が生まれなければ学びは深まらない。この思いを確信したのか、実は、ここの大学でもやったんですけども、ゼミでのビデオを用いた授業分析とか、個々の院生との継続的な対話を通しての経験を通してなのです。

ある程度まとまったことをポンと渡して、はい、これこうだよねっていうのは、意外と簡単にできることで、中学教師になり立ての頃には、そういう授業の仕方もしてました。でも、世の中の様々な問題、教育や教師にまつわる問題にしても、答えが見えないことが、実はすごく多いんですね。単純に、これはこうだと言い切って済むような課題というのは、実はよく考えてみると少ないんです。それをひたすら一緒に考えてもらったのが、ここにいる修了生を含めての院生諸君です。だから本当に申し訳ないんだけど、僕自身が学ぶための素材になっていただいたと。その分、多少は見返りもあったかなと思うんですけども（笑）。僕は皆さんを相手にして、とことんやりあうことで、随分と「学ぶ」ことの面白さ、深さというものを、現職の教員時代以上に理解できたような気がします。

また後で話すことになると思いますけど、教師の役割というのは、子どもたちを学びに誘うということ。これ調べてみる価値あるよね、これって考えてみる価値あるよねっていうところへ、子どもを連れてく仕事だということを確認するようになりました。

多分、中学校の校長を最後に完全退職していたら、気儘に旅行して、本読んで、音楽聞いて、それで人生終わっていたような気がします。あらためて、大学院でもう一回、勉強させられたという思いです。これが、僕が老けなくてすんだ理由のひとつかなというふうに考えています。ですから、これからは、劇的に老けることになると思いますけど（笑）。とにかく、皆さんのお陰で、僕も随分

と勉強したなと強く感じています。これが立命館の教職大学院での5年間でした。以上です。

森田 ありがとうございます。本当に、先生がたの、一言一言から考えさせられて、すごく重要なことを学ばせていただいています。それでは、先生がたが5年間勤務いただいた中で、教職大学院で学ぶ意味とか、中でも、立命館の教職大学院で学ぶ意味をどうお考えになられてきたでしょうか。特に後藤先生であれば、この立命館学園の中で長く勤務されてきましたが、大学院レベルでの教師教育というのは、学園としても新たな一歩を踏み出したことになる気がしますし、小松先生は京都教育大学お教職大学院との違いなども感じられているように思います。こんなところを大切にしていいたら、ここの教職大学院の強みが出せて、この立命館教職大学院の中での学びの姿がより明確になるのだということについて、先生がたの思いを少し教えていただければと思います。

小松 国立大系の教職大学院と、われわれがつくってきた、こういう言い方ができてうれしいんですけども、われわれがつくりあげてきた私学立命館の教職大学院とは、本当に違うんですよ。どこが違うかっていうと、国の施策としては、国立大学の教職大学院の目的は二つある。その中では、中堅的教員を管理職へと養成するためのルートという筋がとても太いんです。だから、教育委員会から預かった中堅の先生がたを鍛えて、管理職の心構えを学ばせ、必要な知識を得させる。そして現場に戻った暁には、管理職になっていただくという発想がベースになっています。それに加えて、ストレートマスターに対しては、学部レベル以上の高度な教育を施して現場に出す。その人たちが、また中核の教員になっていくっていう。これが国立大学の教職大学院の基本的なスタイルなんですね。

ところが、本学では実務家教員の僕が、学校マネジメントを教えるわけですから、考えてみればこんな大学院ちょっと珍しいんですよ。国立大系では、どちらかというと、マネジメント系がすごく強固で、そこが教育委員会と連携して成り立

ってるっていうところが圧倒的に多いんですけども、本学の場合はそうじゃないんですね。現職の先生がたも、本当に出自は様々です。自分で志願して入ってきた方もいるし、派遣で入ってきた人もいるし、さらに他にはない特徴としては、附属校の先生がたが毎年入ってくるってこと。こういう異種混合の状態ってというのは、ある意味「人種のるつぼ」なわけで、すごく面白い反応が起こるんです、見ています。私学の先生と、公立の現職の先生が議論することで火花が散ることもあるし、「ええっ！」という驚きが生まれることもあります。その様子をストレートマスターが実際にグループ討議の機会などを通して見てるわけ。本学の大学院の特徴は、どちらかというところゼネラリスト養成なのかとも思います。なんとしても、中堅教員を管理職に底上げするというような尖ったミッションがなくて、むしろ幅広く教育についての知識を得たり、教育について多角的に考えていくという、そういう内容の授業をやっていると特徴がある大学院だというふうに思います。

結果として何が違ってくるかというところ、まず一つは院生同士の仲が良くなるはずなんです。これやってるとね、それと、お互いに違うところ認め合いながら、とにかく一緒に進もうという気構えを持っている。だから、見ていますと院生同士の仲がすごくいいんです。自分たちが同じ所で飯を食べて、同じ教科書で学んだという意識が非常に強く残っていく。これって現場に置き換えてみると、一種の「同僚性」みたいなものです。これが養えるっていう場合は、いろんな大学院を見てみてきましたけれども、なかなか他の大学院にはないんですね。だから、これが本学の特徴であり、強みだというふうに、僕は今考えている。日本に二つとないんです、こんな大学。だから先生がたの壁もすごく低いんです。どの先生の所に行っても、指導教員から文句言われなくていい。「何であんた、小松先生の研究室から私のゼミに来てるの！」って言う先生はいない。そういう風通しの良さがあるって、先生同士も忌憚なく意見を交わせるっていう、こういう教職大学院は、探しても他には多分ないだろうと思います。

ただ、褒めてばかりはおられません。これが実

は弱みにもなる。専門性という点では、他の大学院に負ける部分もあります。マネジメント系も細かい、臨床教育についても、まだ特別支援の分野がすごく弱いような気がしますね。こういうところを改善していかないと、組織力で勝る国立のほうに喰われていってしまうんじゃないかなっていう危機感があります。

でも、今後の歩みは僕の責任の及ぶところではございませんので（笑）、残った先生がたで上手にやっていただけるんじゃないかと期待しています。楽観的な感想を述べて去っていくのは、大変ありがたいなと思っています。先に、随分たくさんしゃべりました。申し訳ありません。

後藤 それに加えて2点申し上げておきます。1点目は、立命館が総合学園だという強みを今後もっと生かす必要があるのではないかとことです。それは小学校から高校まで教員をずっとしていると、小学校、中学校、高等学校で求められる先生の資質が違っていると感じているからです。高校の先生方は、特に教科の専門性というのが、生徒に知的な刺激を与えるための大きな武器になるわけですから、多少クラスの運営がうまくなくても、教科力のすごさで圧倒できる。そんな専門性を身につけるためには、やはり、それぞれの教科の専門性をより深めるための環境を活かすということが必要です。それに対して、中学校では、生徒たちの声なき声を、耳を澄まして聞くという力、これが教師に求められますし、同時に、思春期という難しい時代を生きている生徒たちに、いかにすんと胸に落ちる物言いができるか、納得をさせて学習に向かわせるかということがとても大事になってきます。教科性と言ってもわかりやすさが勝負どころですし、生徒たちの声にならない思いをキャッチする共感力、その両方が中学校教師には求められます。一番年齢の低い小学校は、実は一番難しく、中高の先生方のいいところを全部持っていないんじゃないかなって思っています。教育の専門家として、とても豊かな教養が必要なんです。教科の専門性というより豊かな教養なんです。それは、先生の間力と言ってもいいのですが、その豊かな人間力とわかりやすく、かみ砕

いて楽しませる引き出しの多さ。そういうものが授業の中に求められます。一流の小学校の先生は、中高の先生とは質の違う授業の達人といった風があります。それぞれの教育の段階で教師に求められるものの比重が違うとしたら、そうした素養を学ぶために、教職大学院をプラットフォームにしなが、総合学園のいろいろなところに出ていって、強みを磨いて戻ってくる、そんな在り方を追求してもらうこともこれからは必要ではないかと思っています。

2 点目は、私が立命館という学園に長くおりますので特に申し上げておきたいことです。戦後のこの学園の教学理念は「平和と民主主義」です。そのことをほんとうに大事にしてきた学園だと思っています。しかし、平和も民主主義も極めて難しい状況が生まれてきています。とりわけ、「民主主義」は面倒くさくて手間がかかる代物ですが、それでもみんなと共に考えると、みんなと共に吟味する。そこから生まれてくる考えを本当に大事にするような、そういうことを大切にする先生を育てていただきたいと思ひますし、立命館が「平和と民主主義」を教学の理念に掲げているなら、その民主主義を支えていくような、そういうマインドを持つ先生方を、是非、この教職大学院でも育てていっていただきたいと願っております。

井上 ありがとうございます。多くの示唆を、いただいたような気がします。この後、立命館の教職大学院が今後どういうところに進んでいくのかということ、われわれ自身しっかりと見定めていかないといけない。そういう時期に差し掛かっていることを感じさせられました。また、中にいたら、なかなか感じられないことを、お二人の先生の意見から覗えたと思ひます。

ちょっと教職大学院から離れまして、先生方は長い教職経験をお持ちですけれども、これまでの教職人生で、お二人の先生それぞれ特に大切になさってきたことっていうのは、どういうことなのかを、お聞かせいただければ、また院生にとっては最高の贈り物になるのではないかと思ひます。よろしくお願ひ、それでは後藤先生から、お願ひします。

後藤 先ほど、小松先生が「信念」を語るのほうそっぽいとおっしゃったので、少し言いにくいのですが……。私は若い時、広津和郎という文芸評論家の「散文精神」という考え方に合ってそのことを大切にしてきました。嘘っぽくなるかもしれませんが、それはこんな一節です。「どんなことがあってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、楽観もせず、生き通していく精神」それが散文精神だと書いてある文章でした。読んだ時、これは教師にも当てはまると思ひたんですね。子どもたちと関わっていると、うまくいかないことの方が多いんです。そんな時には、変に落ち込んで自信を無くしかけます。そんな時、いつもこの一説を頭に浮かべて前を向きました。みだりに悲観しないで粘り強くかかわっていきましょう。広津和郎の「散文精神」は、僕の中ではしんどい時のお守りでした。大切にしてきたものと問われて、咄嗟にこの言葉が浮かびました。折に触れて、私の中に立ち現れて前を向かせてくれた言葉に違いありませんから。

小松 僕たちがしゃべるだけじゃなく、フロアの皆さんからも色々なことを聞きながら進めていくのが、もっとありがたいと思ひますので、もし、ご意見がありましたらどんどん言っていたらと思うんですけど。

私は教員として、人に対して、「こう生きなさい」なんてことは、間違っても言えないと思ひますね。僕自身の生き方自体が、そんなに筋が通ったものであったという自信がありませんので。先ほども言いましたが、ある状況に放り込まれたときに、とにかく自分なりに、そこを何とかしようとして解決を模索する中で、これは絶対そうだよ、これって確実だよ、ねって言えるものを、一個ずつ拾ってきて、それで自分を何となく固めてきたっていう思ひです。

現職の教員時代は、春日井先生と同じように、生徒指導担当の教員として、ある意味むちゃくちゃな指導もやってたんです。本当に。物差しを持ってスカートの中も測りましたしね。そういう時代を振り返ったときに、あらためて、教師って無

知ではいかな。ものを知らない、深くものごとを考えていない人が先生になるって、これほど怖いものはないというか。そんな思いが、反省として僕の中にはあるんです。

だから、ゼミの中ではいつも言ってるんですが、徹底的にものごとを考えたり、違う角度からものごとを考えたら、ものの見方って変わるんじゃないの。あんたには、今そう見えるかもしれないけれども、子どもや親の目から見たら、世の中ってこう見えるんだよね。それ踏まえた上で、自分の考え方をまとめていきなさいって。ずっと、そういうことを言い続けてきたように思います。

これは何かというと、自分の中で、うそっぽいものをできるだけ排除して、これって多分、僕がこれだけ時間をかけて考えてきたんだから、あながち、間違いではないだろうなっていうことだけを、皆さんに伝えていきたい。そう考えたときに、教師ってものは、そこが限界なんじゃないのと思うわけです。だって、10年後、20年後に、あなたがたへの責任、僕はとれないです。小松先生が、あの時こう言ったから私そのとおりに生きたのに、死にたくなりましたって言われたら、立場ないですよ。だから、そういう指導はしたくないですね。一緒に考えた上で、あなたはそう考えるんだったら、やってみたらっていう。あとは、その人の主体的な判断、決意に任せたいと思う。そのような学びのスタイル、ものの考え方みたいなことを、僕はずっと伝えていきかけたし、教師が教師としてできることは、それしかないと思います。

今日のテーマである「せんせいのつくりかた」というタイトルも、今年度 NITS の研修講座に登壇いただいた岩瀬先生たちが作った本のタイトルから借用したものなのです。平仮名で書くと柔らかいでしょう。これ、「教員養成」って書いたら面白くも何ともないわけ。「余白」が全部落ちてしまうわけです。教育というのは、「余白」というものがものすごく大事で、先生が教えてくれたことよりも、その先生が教えてくれたという事実が、子どもにとっては大事なのです。中身は二の次。先生が熱心に教えてくれた。僕のことを考えてくれたっていうのが、ある意味では、先生の先生たるゆえんであるというふうに僕は考えている。だから、そ

ういう点に、ずっとこだわってきたので、皆さんにも、できたら人に「ものを教える」のではなく、子どもたちと「一緒に考える」人になって欲しい。そして、「頑張っておいでよ」って、お尻をぼんとたたいてやるような、そういうスタイルの教育、これがあると僕みたいに斜に構えた、多少うがった見方をする子どもにも居場所ができ、すごく助かります。以上です。

森田 私は、先生がたにぜひ一度お伺いしたいなと思ってたことがあります。長年の経験をふまえながら今のようなお話をされましたが、先生がたが教師をやっていてよかったというか、何か感動したというか、適切な言い方が分かりませんが、そのような思いを感じた瞬間というのは、どのようなときでしたでしょうか。もし何か、いくつか思い当たることがあれば教えていただけないでしょうか。まずは、後藤先生からお願いします。

後藤 教師をやっていてよかったと思う瞬間のことで、思い出すことは、やはり若い時のことです。先ほどのエピソードと同じ時期の頃のことですが、私のクラスに一人の留年生が入ってきました。前年度、ほとんど学校に来られなくて、欠席オーバーで留年をした生徒でした。1980年頃で「登校拒否」という言葉が出始めたころでした。不登校に対する認識もほとんどなく、サボり癖、怠け癖の強い子と思われていた時代でした。私には単なる「サボり癖」が強い子とは思えず、何とか心を開いて学校に出てきてくれないか、そんな期待をもって、家庭訪問をし続けた生徒でした。しかし、半年が経っても、学校に来ることは出来ず、2年目も欠席オーバーで、結局退学することになってしまいました。自分の力では何ともできない子どもの存在を目の当たりにして、とてもむなししい気持ちにさせられました。ただ、家庭に通っている間に、美術が好きで、絵を描くことが好きだということなどをぼつぼつと話すようになっていました。いざ退学が決まって、最後に挨拶に来るといふ日、卒業できずに途中で去っていく彼のために、何か記念になるものをあげたいと思った私は、画材屋さんに行って油絵の道具一式

を買って、彼へのはなむけとしました。そんなことをしてよかったかどうかわかりませんが、好きな絵を描き続けてほしい、ただそれだけの思いで彼に手渡しました。それから、3年たったある日、1枚の手紙が私に届きました。それは、あの時の彼からでした。今度仲間と一緒に絵のグループ展を開くことにしたので、ぜひ先生に見に来てほしいというんですね。うれしかったです。それまで、自分としてはどうすることもできなかった、そういうつらい思い出だったんですけど、3年経って、その手紙が来て、彼が絵を描き続けてくれたこと、外に仲間を作って動き出してくれたということがうれしくて、こんなふうにし少し時間が経ってから、ご褒美をもらうことが教師冥利に尽きることもかもしれないと思わせる一つのエピソードになりました。質問を受け、彼のことが浮かんできました。

森田 ありがとうございます。それでは、小松先生、いかがでしょうか。

小松 正直に言いますと、何か突然に感動したり、教師やって良かったなっていうふうに関心から思ったので教師としてやりがいを感じたという体験がないんです。僕には、良かったなって思った瞬間に、いや、でもねと思ってしまう。すぐに「でも」が出てくるんですね、習性として。でもねと思った瞬間に、でも、こんなこと考えてる俺って結構、邪悪だよなって思うことがあって。そこについては、私は感情の起伏はあまりないんですね。正直なところ。

もちろん卒業生などから、いろんなアクションはあるのですが、それは半ばうれしくもあり面倒でもある。例えば何年後に、先生がこんなこと言ってくれたから、それがすごく今の私に役立ってるなんて同窓会なんかで言われちゃうと、穴があいたら入りたい気持ちになります。そんなつもりで、僕言ってたわけじゃないんだけど。それは、あなたが努力して、その努力の結果じゃないのって、すぐ、そういうふうに関心してしまう。だから、自分の指導の成果だと思わないわけですね。それは、その人が本当に何かをきっかけにし

て、自分で考えてやってくれたことの結果なんだろうから。

あえて言うと、そういう「きっかけ」をつくることだけを毎日色々と飽きずに考えながら、学生や院生や生徒を相手にずっとやってきた。だから、ある意味、毎日が楽しくて、毎日が地獄だったなという、そんな感じが正直いたします。そんなわけで、何か大きな感動や出来事があって、それが自分の人生にすごく励みになったっていうことは、正直あんまりないのです。

森田 ありがとうございます。あまり時間もないのですが、先生がたとお話できるせつかくの機会ですし、先生がたのほうからも、ご要望がありましたので、本日、会場にいる皆さんのほうから、お二人の先生に、ぜひこれは聞いておきたい、これを聞かないと、退職のお送りはできないというようなことがあれば、ご発言いただきたいと思えます。

今日出席されている、修了生、現役の院生、研究科の先生がた、事務室の職員の皆さん、どなたでもOKですので、何か質問があれば、ぜひ出してくださいければと思います。伊田先生がマイクを回していただけますので、マイクが回ったら、ご発言いただければと思います。いかがでしょうか。

来場者1 せつかくですから、両先生に質問したいと思えます。先ほど、小松先生が3回、退職する先生も珍しいよねと、おっしゃいましたが、先生がたに聞いておきたいことがあります。47年、37年、教師生活ということで、お伺いしましたが、もし大学に戻ります。あなたは自由に職業を選べるんですよと、23の頃に戻ったら、先生がたは教師を選びますか。実はね、俺、やりたいことがあったんだよっていうことがあったら、それをぜひ聞かせてください。

後藤 結果として、やはり教員しかできないかもしれないかもしれません。でも、立命館に長くいるつもりはなかったんです。私は出身が岐阜県ですから、いずれ岐阜に帰って先生をするかなと思っていましたが、結局立命館に居着いてしまいました。居心

地がよかったのかもしれませんが。ただ、若い時は詩を書いて生きられるなら、生きていきたいと思うこともありました。詩人にあこがれた時期もありましたが、無理だなと思った時、教員として生きようと腹を決めたように思います。どこでしているかは別として、20代に戻ったとしてもやはり教員しかできないかもしれません。

小松 僕は大学院を出た後、25歳で教師になったのですが、多分その時点の自分にはもっと柔軟性があったと思うんです。今ではというか、10年くらい前に遡ると、その時点ではもう教師しかやれないようになっていたとおもいます。本当に。僕が教師なり立ての頃、退職後にやりたかったのは、ジャズ喫茶のマスターだったんです。そんなことをよく言ってもいましたので、今でも旧知の方に会いますとよく聞かれますね。「小松先生、いつ店、開くの？ 退職したらやるって言ってたじゃん」。でも、もう駄目ですね。同じ「対人専門職」でも(笑)、ちょっと今の自分には、それをやるだけの自信も体力もないです。

だから、人生はどんどん可能性が広がっていくっていうこと、これ、うそだと思う。やることをひとつずつ丹念にやっていると、人生ってどんどんやる事が狭まっていきます。多分、そこに責任っていう問題も出てくるんでしょうね。何でもできる人ってというのは責任なくていいんですよ。でも、やるべきことがどんどん狭まってきて、それしかできないっていうふうになったときに、それってやらざるを得ないよねってことで責任を感じながら仕事をせざるを得なくなる。

多分25歳の頃に、今のような質問をされたら、あれもやりたい、これもやりたいって多分、僕、言ってたと思うんだけど、今はやっぱりこういう人生しか結論としては歩めなかった人間なんだろうなっていうふうに、今は諦めています。以上です。

来場者 1 ありがとうございます。先生がたに残念なお知らせなんですけど、人生、今、100年時代になってしまっておりますので。後藤先生も小松先生も、あと30年生きないといけないので、恐らく10年後、後藤先生は詩人に、そして小松先生

は、あんなこと言っちゃったけど、やっぱりジャズ喫茶やりたくなっちゃったんだよねという姿を楽しみにしております。ありがとうございます。

森田 ありがとうございます。他の方は、いかがでしょうか、皆さま。ぜひ、この機会に。修了生の方でも附属校から出席されている先生がたでも構いませんけども。

来場者 2 貴重なお話ありがとうございます。何か質問したいなと思いつつ悩んだんですけども。後藤先生は生徒の後ろ姿っていうのを追っ掛けることができたとおっしゃってたんですけど、小松先生のほうは教師は子どもを誘うっていうふうにおっしゃってました。子どもの背中を見届けながら子どもを誘うっていうのはどういうことだろうと思ったので質問させていただきます。よろしくお願いします。

後藤 教員という仕事は「渡し守」なのかもしれないと思うことがあります。「渡し守」は、こちら側の岸から向こう側の岸まで、船を漕いで渡してあげる仕事です。「渡し守」は、いつも向こう岸に渡ろうとする人の後ろ姿を見送る人です。わたしの言う「後ろ姿」にはそういうイメージがあります。入学して入って来た生徒たちと3年間なり6年間なり一緒に船に乗って、その生徒を向こう岸に無事に渡してやる仕事、それが教員なのではないかと。その同じ船に乗り合わせているときにどれだけ豊かなものを生徒たちに手渡すことができたか、それが、向こう岸に着いた後、さよならした後に見せる「後ろ姿」に表れるのです。どういう後ろ姿を見せて歩いていくかということが身に着けたことなんです。だから、その後ろ姿を見て、思うようにいっていないという話を聞くと、私たちの中に何か足りなかったのではないかと振り返ったりします。目の前の姿だけで生徒をとらえるのではなく、後ろ姿を見ていくということがとても大事なことはないかと思っています。

小松 さすが後藤先生、詩人ですね。僕は、「学びをつくる」ことが、教師の中核的な仕事だと考

えてる。どうしてかという、人間って自分でエンジンをかけないと動かない。例えば人に命令されて動くっていうのは、本当に動いてることにならないし、後ろからどつかれて前へ進むのは、本当に自分の意思で進んだんじゃない。本当に人間が人間らしく活動するっていうのは、アクティブになるきっかけというのは、自分自身が何か重要なことを見つけたり、気付いた瞬間。これは、僕自身の経験から言うのですが、自分が本当に気付くまでは、人が何と言おうが変わらないんです、人間って。

だから、僕が教師の役目だと思っているのは、学びを通してそこに火を付ける。そういう場所に案内する。わざと危ない所へ連れてって、そこで一緒に火遊びして、火遊び楽しいよね。火遊び楽しいけどさ、自分の身、守るために何考えたらいい？ 何が一番、今ベストだと思う？ ベストがみつからないなら何がベターだと思う？ ちょっと、そこ一緒に考えようよ。そして、考えが浮かんだら、あ、分かったわけ。じゃあ、さよならね。これが学びのスタイルなんじゃないかなって思います。あまりお膳立てをたくさんする必要はないし、教師が予め考えていた方向に行かないからって落胆する必要もない。ある意味、教育は一期一会ですね。会った以上は、そこでいろんなことを一緒に考えて。そこで、じたばたしたなら、多分、それが学びなんです。そこで火が着いた人は、ロケットのように勝手に飛んでいく。どこへ飛んでいくかについては、後藤先生は見送るって表現したけれど、僕はなるべく見たくない。どこへ飛んでいくかについては、決断した時点でその人の責任なのです。他者としての価値判断で、あれって間違ってたよねとか、あれって考え甘いよねっていうのは、あまり言いたくない。

そういうようなことで、僕は学びの場をつくって、そこでやりとりをすることに重点を置いて、それが教師の役目なんじゃないかなっていうふうに言わせていただいた。だから、あなたが研究室来たら、ものすごい議論を吹っ掛けるでしょう。本当に二度と立ち上がれないかと思うギリギリのところまで追い込みますよね。それが僕のやり方。でも、皆必ず這い上がってくる。(笑) あれが、や

っぱり学びなんじゃないかなって感じなんです。だから、仕掛ける方もすごいエネルギーが要るんです。そんなわけで、そろそろ本当に引退しないと身体がもたない。最初に質問された方は、人生100年とおっしゃいましたが、僕は100歳まで生きられるわけがない。そういう考えです。以上です。

森田 ありがとうございます。今お二人の先生がお話しされたことに関わって、某テレビ番組みたいになってしまいますが、プロフェッショナルな教師、プロフェッショナルとは何かと問われたら、どうぞ回答されるでしょうか。小松先生、後藤先生の順番で、いかがでしょう。

小松 これは「現代の学校と教師」の授業で言ったことに尽きるんですよ。教師は「対人援助専門職」です。人を支える仕事です。何ををもって支えるかという、「学び」です。学びを組織する専門家。だから、学びを触発できない人は先生にはなれない。人間関係を取り結べない人は先生には向かない、というふう僕は考えています。ゼミの中でも、「人間を扱うっていうことは、すごく難しいけど面白いことだよ」という話と、でも、その中心は「学びという営み」なんだよという話をずっとしてきたつもりでおります。対人専門職だということと、学びの専門家であること。これが教師の専門性の「核」だと思っています。

後藤 そういう小松先生の話の聞くとなるほどと思いますが、私はもっとシンプルに「納得できるまで、こだわり続ける人」ではないかと思えます。納得できるまでこだわるということは、授業であれ、生徒と一緒に何かを取り組むにせよ、まだまだという思いを持ち続けながら、もっと高い高みに上るにはどうしたらいいのか、妥協しないで考え、こだわり続けることだと思います。では、何にこだわればいいのか。おそらく、人それぞれでいいのかもしれませんが、私は専門が国語ですから、一つの例をあげれば、「言葉の世界を広げる」ことには、とくにこだわっていただきたいと思うのです。言葉の世界を広げるということは、単に語彙

を増やすということだけでなく、間違いなくものを上手に考えることができるようになることです。その世界を広げる努力をしないと、正確に生徒たちに届ける言葉は生まれません。先生方それぞれによってこだわることは違うと思いますが、できれば、その中に「言葉の世界を広げる」ことも入れておいていただくと、うれしいです。

井上 ありがとうございます。残り時間が5分ぐらいとなりました。きょうのタイトルが、「せんせいのつくりかた」ということですので、お二人の先生方から、院生や修了生へのメッセージを、お願いしたいと思っています。よろしく願います。

小松 結論を言うと、教師って耐える仕事だと思ふんですよ。先ほども言いましたように人間を相手にする専門職でしょ。人を相手にする仕事であるわけですから、労働の性質が「感情労働」なんです。ですから、自分の感情をコントロールしながら、相手の感情に働き掛けるという、極めてアクロバティックなことを教師はやらなきゃならないわけですね。

ホックシールドも言ってるように、感情労働に従事する者は、自分の感情を押し殺して他者に対応しなければならぬときがどうしても多くなる。ストレスがたまります。この感情労働のしんどさに耐え抜く力のようなものを会得しないと、教師自身が折れてしまいます。ですから最後に言いたいのは、教師の仕事というのは、そういう性質のものであるということをはっきりと自覚しながら、自分をコントロールすること。自分が容易にポキポキ折れないように、感情労働のしんどさを耐え抜く。そのことを常に念頭に置いて、しなやかにやっていただければと思います。

先ほど会場を準備するとき、事務の方と話しをしていたんですが、ひとつのことばかりに集中していると、ほんと疲れるんです。だから時々、風船をしぼめるようにガス抜きして自分の中を空にしたり、日本語が全く聞こえない海外へ飛んで行ってみたりして、頭の中をすっかり入れ替えるっていう、そういうやり方も場合によっては必要

かなというふうに思います。自分の身の処し方がうまくいかない人が教師になったら、身の処し方を子どもに教えることは多分できないと思います。だから、自分の性格とか自分の癖に自覚的になることで陥穽に落ち込むことなく、このしんどい労働に耐えられるように、是非なっただけでなくと・・・。なれるかどうかは知りませんが。なってくれたら、ありがたいなと思う。以上です。

後藤 この会は自分なりの最後のまとめになるのだろうと思って臨みましたが、小松先生と私とで同じ質問を受けて、どんな風に考えるかをつき合わせてみると、こんなに小松先生と世界観が違うんだということ、改めて気づかされたのが、とても新鮮な発見でした。小松先生はきちんと意味づけをする先生ですし、私は情で語ることが多い、二人の違いを見るようでした。あえて、最後に皆さんにお伝えしたいことがあるとしたら、「二つの目」を持ってほしいと思っています。これは、宮本武蔵が『五輪書』の中で「観見二つの目を持つ」と言ったことです。「観」というのは観察の観で、「見」は普通の見の目です。「観」は観察のように物事を細かく見極めること。そうした目を持つこと。「見」は広い視点で物事を見る、大局的な目で物事をとらえることです。細かく見る目と大局的に見る目、この両方を見る目を持っていないと、どこかで息詰まるのです。それは、目を凝らし過ぎると偏屈になりやすく、目を広げ過ぎると細かなことが見えなくなるということです。常に「観と見」の間をしなやかに行き来する目を育てていただけたらうれしいです。

井上 どうも、ありがとうございました。そろそろ、お時間です。長年の教職経験の中で、培われた含蓄のあるお言葉がたくさん聞けて、有意義な時間を過ごせることができたと思います。お二人の先生どうも、ありがとうございました。

それでは森田研究科長より、教職研究科を代表して謝辞をいただきたいと思います。森田先生どうぞ、よろしくお願いします。

森田 それでは研究科を代表して、一言ごあい

さつをさせていただきます。後藤先生、小松先生、本当に5年間ありがとうございました。私も、この退職記念のシンポジウムを企画するにあたり、いろいろ先生がたとお話しさせていただいたのですけども、4月になったときに、先生がたがい無い、この研究科の姿が未だに想像ができません。それは、本当に、この5年間、先生がたのお力に支えられて、この教職研究科が、ここまで来ることができたからだろうと、あらためて感じているところです。また、今日、先生がたのご経歴や、いろいろなお話を聞きながら、私たちは、本当に偉大な先生がたと一緒に仕事をさせていただくことができたことに感謝しなければならないとも感じています。

後藤先生とは、先生が立命館小学校の設置準備をされている頃に、ちょうど私は産業社会学部の小学校教員養成課程の設置準備を担当してましたので、その頃から本当にいろいろとお話しさせていただきました。小松先生とは、もう10年以上前になりますが、京都教育大学の教職大学院の時代にも一緒に仕事させていただいて、それからの付き合いということになります。この新しい教職研究科を始動することは、立命館大学、立命館学園にとっての、一つの新しいチャレンジであり、いろんなことを本当にゼロからつくり上げていく必要がありましたが、お二人の先生がたに、ご尽力いただいて研究科の第1期といいますか、最初の大きな土台をつくっていただいたということを実感しております。

先生がたを最後にお送りする言葉、いろいろ考えたのですが、思い付く言葉は三つしかありませんでした。

一つは、長年の教師生活、大学院の教員生活を含めて、本当にお疲れ様でしたという言葉です。

もう一つは、先生がた、本当にありがとうございましたと、先生がたと一緒に仕事できたことに感謝したいという言葉です。

そして、最後の1つは、オンラインの時代ですから、どこにいても、つながることができますので、これが最後ではなくて、先生がた、いろいろな所に行かれても、研究科の私たちの仕事ぶりがありますとか、それから修了生、今の院生たちが

将来、教師として活躍していく姿を、見ながら、ぜひこれからも支えて下さいという言葉です。

簡単ではありますが、謝辞とさせていただきます。本当に先生がた長年お疲れさまでございました。どうも、ありがとうございました。